

第60回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

つなぐ思いやり

栃木県 宇都宮大学共同教育学部附属中学校 三学年

福田 繭

コロナ禍初の夏を迎えた日、とても暑い日でした。母の職場で見かけたことがある女性が私の家の前で立っていました。

「お母さん、病院に着いてゆっくり過ごしているみたい。たまにはゆっくりとさせてあげないかね。今日のお夕飯とか明日のお弁当とかは心配ないの？」

と女性は言いました。その女性の明るい声は、私に、母は病院で普段あまり見ないテレビや好きな小説でも読んで不自由なく過ごしているのだなと連想させてくれました。その女性は、母の勤め先で古くから付き合いのある保険会社の人でした。

コロナ禍であったため、病院への付き添い、面会はしてはいけないということでした。私は母に心配させてはいけない、母がいなくても普段通りの日常生活をと思う反面、母とたあいのない会話をしたいという想いもあり、自分の中に葛藤がありました。しかし、私は母を不安にさせたくない想いが強くでしまい、母から連絡が来てもそっけなく返答していました。母を不安にさせたくないという一心でした。

保険会社のその女性は、私の家の前で今日の母との会話、様子はどうだったよ、と明るく話をしてくれました。私はその話に想像をのせて母は楽しく病院で過ごしていると思い、安心感を持つようになりました。

少し体が小さくなった母が退院する時、入院費の精算に同行しました。入院とはけっこうお金がかかるものだと感じました。母は

「保険に入っているから心配はないの。」

といました。その時私は、保険のコマーシャルを思い出しました。保険のコマーシャルがテレビで流れると、なぜか手をとめて見入ってしまい、見終るとなぜか気持ちがほっこりする不思議な感情になります。その感情と自分の感情が一致しました。保険とは親身になって相手に寄り添うものなのだと思います。

その女性が、私に母の様子を退院するまで明るい声で話をしてくれました。それは心配させないように私の不安をぬぐってくれていたのだと感じました。また私の家族構成を理解してくれているため、私のお弁当のことを気にしてくれていたのだなとも思いました。そうした気配りで私たち親子の不安をとりのぞいてくれていたのだともわかりました。

第60回中学生作文コンクール

生命保険とは、「一生涯を保障するもの」と一言で言ってしまうそうですが、予想を超える、現実に起きてしまったらどうしようもないことを保障し、次につなげてくれるものだと深く感じました。

月日が経って、すこし大人になった私は、明るい声のあの女性の方に、あの時伝えたかった、「ありがとう」を明るく大きな声で伝えたいです。